

「新古今集詞連歌」の本歌と付合

竹島一希

一、はじめに

「新古今集詞連歌」は、その全句に渡り『新古今和歌集』の歌を本歌取りした連歌である。新古今集の詞^三を織り込みながら、なおかつ連歌としての形式を整えるところに、当該連歌の困難や興味も生まれたのであろうと、ひとまずは推測できる。

さて、「新古今集詞連歌」も連歌であるからには、ある句とその前後の句の間に、何らかの関連性が存在しているはずである。では、それらの句の本歌の間にも関連性が存在するのであろうか。

当座における作句の順序としては、まず前句を聞き、それに合う歌を新古今集から探し出し、その一部を詞として撰取した句を詠じたと考えられる。句に歌の詞を引用することが絶対条件であるなら、本歌の決定が作句の前提にな

っていたことは疑いない。その過程で、次の句の本歌を想起するというとき、歌の意味がその鍵になったとは考えられない。和歌の意味のみを記憶することは不可能であるし、情報量の点からも非効率的である。実際、以下の分析を通して、意味よりも表面的な徴によって和歌が想起されたことが明らかになるであろう。

本稿は、当該連歌における隣接する句同士の、さらには隣接する本歌同士の関係性を講究することを目標とする。最初にその準備として、当該連歌の本歌となった和歌を総体的に考察し、その後付合の形式を考える。

二、本歌とその傾向

「新古今集詞連歌」の本歌に採択された歌には、どのような傾向が見られるのだろうか。なお、当該連歌において、

同一の歌が二度本歌に用いられることは、一例限りであった⁽¹⁾。

表1 作者別被選歌数⁽²⁾

被選歌数	歌人	新古今集 入集歌数	自・六
1	西行	95首	自・六
2	藤原定家	46首	自・六
3	藤原俊成	72首	自・六
4	藤原良経	79首	自・六
5	慈円	92首	自・六
6	飛鳥井雅経	22首	自
6	柿本人麻呂	23首	自
6	紀貫之	33首	自
6	式子内親王	49首	自
6	寂然	14首	自
6	寂蓮	35首	自
6	藤原家隆	43首	自・六

※「自・六」の欄は、当該歌人が自讃歌・六家集の作者であるかを示す

表1は、当該連歌が基づく本歌の、作者別被選歌数の統計である。

西行以下五位までを新古今集時代の当代歌人が占めている点、また自讃歌の作者との重複が多い点が目に留まる。まず、前者は、新古今集入集歌数の反映と見るべきである。統計によると、西行・藤原定家・藤原俊成の上位三名によって、本歌の三割程度が占められている。だが、これは、中世歌壇の彼らを重んじる姿勢との一貫性を示しているに過ぎず、この三名は言わば例外である。それに対して、この三名以外の当代歌人を尊重する態度は強くない。雅経・式子内親王・寂蓮・家隆は三首選ばれているとはいえず、人麻呂・貫之と同数であり、表に掲載されていない後鳥羽院に至っては一首である。これは、新古今集時代の代表的作者を選集した自讃歌との関係を示す後者と矛盾しているように見える。しかし、他の自讃歌作者（宮内卿・後鳥羽院・俊成女・藤原有家・藤原秀能・源具親・源通具・源通光）の扱いの低さ（特に宮内卿・藤原有家・源具親は一首も選ばれていない）を思うと、自讃歌作者との重複に当代歌人の尊崇を見ることはできない。やはり、西行等六家集の歌人が上位を占有することの理由を、彼らの和歌が新古今集に数多く入集していることに求めたい。

表1からは、本歌の選択において、特定の時代・作者を過度に重んじる意識が連衆の間にはなかったことが読み取れる。

表2 秀歌選との重複状況

句号	歌番号	新古今集詞	秀歌選	備考
59	七四	青柳の葛	自	
57	一二六八	心も月を	代	但し、「心と月を」
53	九七三	蘆火焚く屋に	代・大・自	
47	三七	波に離るる	一・来	制の詞
45	九五二	日も夕暮の	自	
45	二六四	日も夕暮の	大	
40	一	ふりにし里に	自	
38	三八〇	野にも山にも	自	
31	九四一	忘るなど契り	自	
29	五九四	露よりなれし	自	
28	二〇一	草の庵の	自	
24	一一四二	尾上の鐘の	自	
23	五六一	雲に風の	自	
19		松の戸に絶え絶え	自	
17	一九〇二	六の道に返す	自	
12	一六五九	昔語らむ	自	
7	四九一	霧立ち上る	一・来・自	制の詞
4	三五一	跡吹き送る	自	
1	三八	峰に分かるる	自	

67	六七	波に荒らすな	代・大・来・自	制の詞(甲なし)	62	一七四	誰かはとはむ	大
94	一六九	霞に落つる	一・来	制の詞	71	一六七五	人は答へず	大
87	二六二	しばしとてこそ	大		73	一三〇二	恨み侘び待たじ	自
76	七三	乱れて靡く	一・来	制の詞(甲なし)	76	七三	乱れて靡く	一・来

※「秀歌選」の欄では、近代秀歌Ⅱ代、詠歌大概Ⅱ大、詠歌一体Ⅱ一、近來風体Ⅱ来、自讃歌Ⅱ自の略称を用いる。
 ※備考欄の「制の詞(甲なし)」は、当該詞が『詠歌一体』甲本では制の詞ではないことを示す

表2は、本歌として選ばれた和歌の、他の秀歌選との重複状況を一覧にしたものである。

ここでも自讃歌との重複が目されるが、これも偶然の結果であろう。自讃歌として一書になされている歌の中で、新古今集が出典と思われるものは一五二首である。表2から、当該連歌の本歌と自讃歌との重複は一九首であることが分かるが、その一五二首における割合は13%と決して高くはない。他の秀歌選の場合も同様に低く、このことは特定の秀歌選から本歌を選択した形跡がないことを意味している。本歌が他でもない新古今集から選択されていること

を改めて確認した。

また、制の詞に対する意識の低さも看過できない。優れた新古今の表現の後人による安易な模倣を制限するために、制の詞は設けられたと考えられるが、その制の詞を四句に渡り撰取することは、第一に禁制に対する、第二に名高い新古今の表現に対する意識の希薄さを示している。すなわち、原則的に避けるべきはずの制の詞が四句にも見られることは、連衆に絶対的な禁止意識が低かったこととである。また、斬新な新古今の表現を四句にしか撰取しないことは、そのような新古今集らしさを、撰取する際の興味の中心に据えていないということでもある。連衆に制の詞に関する知識がなかったとは考えにくいので、制の詞よりも新古今集に入集しているかどうかの方が重要視されたのであろう。

例えば、発句「花に明けて峰に分るる雲もなし」の新古今集詞「峰に分るる」は、元を正せば、句の本歌（第三章参照）の本歌取りの典拠「風吹けば峰に分るる白雲の絶えてつれなき君が心か（古今集・恋二・六〇一・壬生忠岑）の詞である。したがって、「峰に分るる」を撰取することは、二重に典拠を踏まえることになる。だが、この場合も、あくまでも新古今集歌であるかが問題だったのではないか。

表2からは、新古今集から本歌を選択したこと、また新古今集への入集を重視したことを読み取ることができた。

表3 部立別被選歌数

部立名	1	2	3	4	5	5	5
被選歌数	春上 12首	秋上 11首	秋下 9首	羈旅 8首	春下 7首	夏 7首	恋五 7首
部立歌数	98首	152首	114首	94首	76首	110首	100首
占有率	12%	7%	8%	9%	9%	6%	7%
							102首
							7首
							雑中

※占有率はその部立の総歌数における被選歌数の割合

表3は、本歌となった和歌が分類される、新古今集の部立を表にしたものである。

当該連歌の本歌の所属として、最も多数を占める春上でさえ、全本歌の一割程度しか選択されていない。すなわち、本歌は新古今集内で適度に分散しているといえ、表1から導き出した、特定の時代や作者を尊重する意識のないことと合わせて、本歌選択における非偏向性を示している。

以上の三表から読み取った内容を改めて確認すると、

- 一、本歌の選択は、新古今集を対象としている(表2)
- 一、他の秀歌選との重複は問題ではない(表2)

一、新古今集時代を特別視してはいない(表1)
一、新古今集内で、本歌の採用に関する偏差は存在しない(表1・3)

の四点に集約できる。

三、句・本歌と付合

第二章の分析によって、本歌の選択は新古今集から恣意的な偏りなく行われたことが知られた。では、その選択はどのような根拠に基づいているのだろうか。

最初に、発句から第三までを詳しく見て、大まかな見通しを立てたい。

1 [花]に明けて峰に分るる雲もなし 鷲尾隆康

春の夜の夢の浮橋とだえして峰に分るる横雲の空

(春上・三八・藤原定家)

あひ見ても峰に分るる白雲のかかるこの世の厭はしきかな
(秋教・一九五八・源季広)

2 春の夜一夜霞み来し月 後柏原天皇

今朝はしも嘆きもすらむいたづらに春の夜一夜夢をだに見で
(恋三・一一七八・和泉式部)

3 帰る雁今はの声も名残にて 冷泉永宣³⁾
帰る雁今はの心ありあけに月と花との名こそ惜しけれ⁴⁾
(春上・六一・藤原良経)

発句の本歌には、藤原定家詠と源季広詠の二首を想定した。発句に含まれる新古今集詞「峰に分るる」が、両首に同様に詠まれていいるからである。だが、より精確には、発句の「花に明けて」と定家詠の「夜の夢の浮橋とだえ」に、ともに夜明けの時間帯であるという呼応が見られ、本歌は定家詠であった可能性が高い。

さらに、脇句の作者後柏原天皇も発句の本歌を定家詠と考えていたことが、定家詠の「春の夜の夢の浮橋」と類似する「春の夜一夜夢」を含む和泉式部詠を本歌として脇句を作していることに窺える。

また、発句の「花」と脇句の「月」は、その本歌に含まれない、句独自の趣向である。張行年月は三月一日であるから、発句の「花」は時宜に合った素材である。そして脇句の「月」は、発句に格を合わせるために詠まれたのであろう。それに対して第三は、「月と花」という詞を含む本歌を取っている。この部分は句に表れてはいないとはいえ、発句と脇句の趣向を意識した本歌を取ることで、連続性を保っているのである。

このように、当該連歌では、隣接する句・本歌に共通の

事項が含まれていることが多く、そのため本稿は、付合の型を以下の四種に分類し、考察を加える。

- ① 隣接する本歌が同一作者によるもの
- ② 隣接する本歌が同一部立であるもの
- ③ 隣接する句・本歌が同一の言葉を含むもの
- ④ 介在する寄合が句を結び付けるもの

① 隣接する本歌が同一作者によるもの

本歌が呼び起こされる最も単純な契機には、同じ作者の和歌であることが挙げられる。この型による付合は、二例を数える。

(ア)

12 我思ふどち昔語らむ 知仁親王

山里にうき世はむ友もがな悔しく過ぎし昔語らむ

(雑中・一六五九・西行)

13 交はるに知られず知らぬ中は憂し 万里小路秀房

疎くなる人を何とて恨むらん知られず知らぬ折もありし
(恋四・一一九七・西行)

13 は、前句と同じ西行詠を本歌としている。言葉の上でも、「山里に」歌にある「うき世」を、「中は憂し」の表

現で受けている。相手との距離を詠じる内容の点からも、両首、さらに両句は、適切な付合である。

(イ)

43 常磐にて杉のむら立ち陰深み 甘露寺元長

山深み杉のむら立ち見えぬまで尾上の風に花の散るかな

(春下・一一二一・源経信)

聞かずともここをせにせむ時鳥山田の原の杉のむら立ち

(夏・二二七・西行)

44 あはれ知るらむ鳥の声々 三条西公条

誰住みてあはれ知るらむ山里の雨降りすさむ夕暮の空

(雑中・一六四二・西行)

43には二首の本歌が想定されている。そのうち、句の「陰深み」と源経信詠の「山深み」の重なりによって、経信詠が本歌にふさわしい。しかし、44が付くと、俄然西行詠の方が本歌として意識される。それは、44の本歌の作者が西行であることに加えて、句に「鳥の声々」と詠まれているからである。鳥の趣向は、44の本歌から導き出されたものではない。44の前後で鳥の話題が見えるのは、43の西行詠のみである。ここで43の本歌を西行詠にすると、「時鳥」から「鳥の声々」というように、無理なく接続する。つまり、43の時点では本歌は経信詠であったが、44が付けられ

たことで、43の本歌の資格が西行詠の方に移行したと考えられる。これは、44を付けた公条の手柄であるが、同じ新古今集詞を含む歌が複数存在することを把握していなければ、前句の本歌を変化させる付合は不可能であろう。

② 隣接する本歌が同一部立であるもの

次に、隣接する本歌が、新古今集内で同じ部立に入集している付合を考察する。この型の付合は四例存在する。

(ウ)

7 暮るるより霧立ち上る山高み 三条西公条

村雨の露もまだひぬ真木の葉に霧立ち上る秋の夕暮

(秋下・四九一・寂蓮)

8 櫛まばらに秋ぞなり行く

万里小路秀房

立田山櫛まばらになるままに深くも鹿のそよくなるかな

(秋下・四五一・俊恵)

(エ)

25 松一木時雨に濡れぬ宿り貸せ 庭田重親

心とや紅葉はすらむ立田山松は時雨に濡れぬものは

(秋下・五二七・藤原俊成)

26 まさの葉かづら散りまがふころ 三条西公条

松に這ふまさの葉かづら散りにけり外山の秋は風すさぶらむ
(秋下・五三八・西行)

79 浅茅生に手枕なる虫の声 万里小路秀房

秋の色は籬に疎くなり行けど手枕なる閨の月影

(秋上・四三一・式子内親王)

80 かくも寂しき秋はいかなる 冷泉永宣

おぼつかない秋はいかなるゆゑのあればずるに物のかんしかるらむ
(秋上・三六七・西行)

以上の三例は、秋上・秋下の部立に属している本歌による付合である。付句の「秋」(ウ・オ)・「ころ」(エ)の表現は、前句と時節を合わせたことを示しているが、この点に前句の本歌と同じ部立の本歌を選択した影響を見ることができる。

特に(エ)の趣向はそれに留まらない。付句の作者公条は、前句の「松」から26の本歌の「松に這ふ」を連想し、そしてすぐ下の「まさの葉かづら散り」を詞として撰取する。すると、付合では、前句の「松」に付句の「まさの葉かづら」が「這」っている情景になり、25/26の付合全体が26の本歌に依存した緊密な付合を構成することになる。詞の切り取り方に、その手腕が表れている。

(カ)

97 春に今色なき人のあらじかし 知仁親王

明石濁色なき人の袖を見よすずるに月も宿る物かは

(雑上・一五五八・藤原秀能)

98 小田の蛙の声のあはれさ 冷泉永宣

折にあへばこれもさすがにあはれなり小田の蛙の夕暮の
声 (雑上・一四七七・藤原忠良)

(カ)の付合の起点になっているのは、先の三例のような四季の部立ではなく、雑の部である。98に三例のような時間を表す言葉が含まれていないのは、雑の部立の本歌によって付けられているからであろう。雑部は四季の部に比して統一性が見られないので、付句に時間を示す言葉を含ませて前句との一体感を高めるといふ単純な方法はとりにくい。97の本歌は秋であるが、一句は春の季である。永宣は同じ雑上の部立の春の歌ということで、98の本歌を想起し、前句に季節を合わせている。(カ)では、共通の部立であることが有効に活用されたと言ひ難いだろう。

③ 隣接する句・本歌が同一の言葉を含むもの

③では、前後の句・本歌に共通の言葉が含まれている場

合を考察する。

(キ)

29 故郷の露よりなれし旅の袖 甘露寺伊長

霜氷る袖にも影は残りけり露よりなれし有明の月

(冬・五九四・源通具)

30 月に留めて見ゆる面影 後柏原天皇

面影の忘らるまじき別れかな名残を人の月に留めて

(恋三・一一八五・西行)

31 忘るなど契り置きしもいつならむ 冷泉永宣

忘れじと契りて出でし面影は見ゆるらむものを故郷の月

(羈旅・九四一・藤原良経)

29と31の本歌には、全て「月」と「影」が含まれている。29の「影」は「光」の意味であり、30・31の「面影」とはそれが異なるとはいえ、29から31の本歌の移動は、語句の表面的な共通性によってなされたと考えてよいだろう。この三首は同じ表徴をもつことから連想されたのである。だが、それが句の表面に表れているのは30のみであることに注意しよう。29に付ける30は連想の根拠を句に明示することをもって趣向とし、一方31はそれを明示しないことをもって趣向とする。

(ク)

92 狩人越ゆる山の下道 三条西公条

秋されば狩人越ゆる立田山立ちても居ても物をしぞ思ふ

(雑中・一六八八・柿本人麻呂)

93 谷狭み深くも鹿のかくろひて 鷺尾隆康

立田山梢まばらになるままに深くも鹿のそよくなるかな

(秋下・四五二・俊恵)

93は、92の「狩人」から「鹿」を付けたのであろう。それに加えて、句には表現されていないが、92の本歌と93の本歌は、同じ「立田山」を舞台とした和歌である。人麻呂詠は立田山―狩人、俊恵詠は立田山―鹿の組み合わせで記憶されていて、立田山を媒として俊恵詠が想起されたのではないだろうか。

このような言葉の共通性という視点を応用すれば、前稿で二首の本歌を想定した句において、そのうちでより確実性の高い一首を決定しよう。

(ケ)

44 あはれ知るらむ鳥の声々 三条西公条

誰住みてあはれ知るらむ山里の雨降りすさむ夕暮の空

(雑中・一六四二・西行)

45 小鷹狩り日も夕暮の帰るさに 鷺尾隆康

おのづから涼しくもあるか夏衣日も夕暮の雨の名残に

(夏・一六四四・藤原清輔)

いづくにか今宵は宿をかり衣日も夕暮の峰の嵐に

(羈旅・九五二・藤原定家)

46 ことのほかなる袖の秋風 冷泉永宣

山里は世の憂きよりは住み侘びぬことのほかなる峰の嵐に

(雑中・一六二三・宜秋門院丹後)

45には二首の本歌が想定される。ともに「夕暮」の詞を含み、44の本歌と呼応している。特に「雨」の語を共有する藤原清輔詠を本歌と考えることも可能であるが、それよりも句の「小鷹狩り」と類似する「かり衣(借り)」と「狩衣」の掛詞)を含む藤原定家詠を本歌としたい(八)。さらに、46の作者永宣は、定家詠と同じ歌末「峰の嵐に」をもつ宜秋門院丹後詠を本歌として作句している。句意や本歌の内容よりも、同じ歌末を意図的に反復することを、付合の起点にしようとしている。

(コ)

58 山の秋風いとど激しき 万里小路秀房

み吉野の山の秋風小夜更けて故郷寒く衣打つなり

(秋下・四八三・飛鳥井雅経)

飛鳥川紅葉葉流る葛城の山の秋風吹きぞしくらし

(秋下・五四一・柿本人麻呂)

59 青柳の葛も散れば露かけて 甘露寺元長

白雲の絶え間に靡く青柳の葛城山に春風ぞ吹く

(春上・七四・飛鳥井雅経)

60 こころ玉ぬし波の乱れ藻

庭田重親

草の上まここに玉ぬし白露を下葉の霜と結ぶ冬かな

(冬・六一九・曾祢好忠)

58 の新古今集詞「山の秋風」は、飛鳥井雅経詠と柿本人

麻呂詠の二首に詠まれている。そして、59の本歌の作者が

雅経であることに注目して、①の要領で、58/59は同一作

者の歌を二首連続させた付合と考えることが可能である。

しかし同時に、人麻呂詠の「葛城の山」と59の本歌の「葛

城山」の共通点にも注意すべきであろう。59の作者元長は、

新古今集詞「山の秋風」をもつ新古今集歌が二首存在する

ことに思い至りその両方の特徴を兼備した、すなわち「葛

城山」を詠じた雅経歌詠を本歌に選択したのである。しか

も、59は「葛城山」とまでは言わず、「青柳の葛」で留め

て、名所と無関係で本歌にも詠ぜられていない植物名を新

たに詠み出している。勿論前句に「山」がある以上、安易

に「葛城山」と詠むことは不可能であるが、その制約を逆

手に取り、元長は趣向を豊かなものにしようとしている。

(サ)

67 松島や雄島は月の秋ぞかし 冷泉永宣

立ち帰り又も来て見む松島や雄島の苦屋波に荒らすな

(羈旅・九三三・藤原俊成)

68 苦屋は露のもり明かしつつ

庭田重親

稲葉吹く風にまかせて住む庵は月ぞまことにもり明かし

ける (秋上・四二八・俊成女)

秋の田に庵さす賤の苦をあらみ月とともにやもり明かす

らむ (秋上・四三一・藤原顕輔)

68の本歌も二首想定した。同じ秋上の部立に属し、月下

の庵の様子を詠む内容も近い。だが、67の本歌の「苦屋」

を受けた68の句の「苦屋」を裏付けるのは、「苦」の語を

持つ藤原顕輔詠である。

(シ)

85 法の道入逢の鐘に言問て 鷲尾隆康

山里の春の夕暮来て見れば入逢の鐘に花ぞ散りける

(春下・一一六・能因)

86 住む陰深き山の梯 甘露寺伊長

白雲のたな引き渡るあしびきの山の梯今日や越えなむ

(羈旅・九〇六・紀貫之)

旅人の袖吹き返す秋風に夕日寂しき山の梯

(羈旅・九五三・藤原定家)

86の本歌も二首想定されているが、夕暮れの情景を詠んでいる藤原定家詠の方が、85との共通性が高く、本歌として適切である。

隣接する句やその本歌を分析すると、語句の共通性によって、それらが強く結び付いていることが知られた。その共通性は付ける際に活用されるが、(イ)に見られた本歌のずらしという、もう一段上の趣向を凝らすときに、最も有効に機能していた。

④ 介在する寄合が句を結び付けるもの

③までは、付合の起点となっている共通性を指摘した。①の作者、②の部立、③の言葉が、次の句の本歌を呼び寄せる契機となっていた。それらは、句と本歌を並置してみると認識可能な単純なものであった。④では、それらでは処理できない、表面には連想の痕跡が残されていない付合を考察する。

(ス)

21 岩間閉ぢし氷も踏むに解けぬらむ 冷泉永宣

岩間閉ぢし氷も今朝は解け初めて苔の下水道求むらむ

22 霞みて遠き水の水上 鷺尾隆康

年経たる宇治の橋守言問はむ幾代になりぬ水の水上

(賀・七四三・藤原清輔)

23 鳥帰る雲に風の吹絶えて 甘露寺伊長

移り行く雲に嵐の声すなり散るかまさ木の葛城の山

(冬・五六一・飛鳥井雅経)

(ス)では、21/22は水に関係する本歌の結び付きで連続している。それに対して、22/23の連想の根拠は明確ではない。22の本歌の「言問はむ」から、23の本歌の「声すなり」が、音声という共通性によって発想されたとは考えにくい。共通の程度が漠然としすぎているからである。

ここで、連歌らしく、寄合を導入してみよう。寄合書『連珠合璧集』^④には、

水上↓山の嵐

嵐↓水上

の寄合が掲出されている。寄合とは強い連想関係にある言葉のことで、特定の古典文学に端を開く場合も多い。この二つの寄合も、新古今集・冬・五五四・藤原資宗の、

筏士よ待て言問はむ水上はいかばかり吹く山の嵐ぞ

を典拠として成立すると考えられる^⑤。この歌を(ス)に補入してみよう。

(メ)

21 岩間閉ぢし氷も踏むに解けぬらむ 冷泉永宣

岩間閉ぢし氷も今朝は解け初めて苔の下水道求むらむ

(春上・七・西行)

22 霞みて遠き水の水上 鷲尾隆康

年経たる宇治の橋守言問はむ幾代になりぬ水の水上

(賀・七四三・藤原清輔)

● 筏士よ待て言問はむ水上 はいかばかり吹く山の嵐を

(冬・五五四・藤原資宗)

23 鳥帰る雲に嵐の吹絶えて 甘露寺伊長

移り行く雲に嵐の声すなり散るかまさ木の葛城の山

(冬・五六一・飛鳥井雅経)

五五四番歌の補入により、22/23が連続する根拠が明らかになる。22の本歌と五五四番歌が「言問はむ・水上」の共通性のために連続し、また五五四番歌と23の本歌は部立と「山」・「嵐」の共通性のために連続する。(ス)では、句と本歌の単純な連なりに還元されない連続らしい連想が働いている。次の(セ)も同様に考えられる。

(セ)

37 立ち寄れば森の雪に時鳥 後柏原天皇

時鳥声待つほどは片岡の森の雪に立ちや濡れまし

(夏・一九一・紫式部)

38 野にも山にも行きやらぬ道 高倉範久

ながめ侘びぬ秋よりほかの宿もがな野にも山にも月やすむらむ

(秋上・三八〇・式子内親王)

おぼつかな野にも山にもしら露の何ごとをか思ひ置くらむ

(秋下・四六五・村上天皇)

39 隠家は人來させじと戸を閉て 冷泉永宣

山里は人來させじと思はねど訪はるるこそ疎くなり行く

(雑中・一六六〇・西行)

40 ふりにし里になりて荒れぬる 甘露寺元長

み吉野は山も霞みて白雪のふりにし里に春は來にけり

(春上・一・藤原良経)

まず38においては、37の「森の雪」と「しら露」の共通性から、村上天皇詠を本歌としてよいだろう。39が付いても、本歌の資格は動かない。次に、39/40では、「里」・「來」の共通の語に加えて、39の本歌の作者西行から吉野が連想され、40の藤原良経詠に発展したと考えられる。西行と吉野をめぐる説話の存在からは、言わば「西行↓吉野」という寄合を想像させられる。さらに、ここで別の寄合を導入すると、新たな連想の根拠が浮かび上がる。『連珠合璧集』には、

隠家↓吉野山

の寄合が掲出されている。この寄合の典拠には、古今集・雑下・九五〇・読人不知の、

み吉野の山のあなたに宿もがな世の憂きときの隠家が
せむ

が推定される。これを(セ)に補入してみよう。

(セ)

38 野にも山にも行きやらぬ道 高倉範久

おぼつかかな野にも山にもしら露の何ごとをかは思ひ置く
らむ

(秋下・四六五・村上天皇)

39 隠家は人來させじと戸を閉て 冷泉永宣

山里は人來させじと思はねど訪はるることぞ疎くなり行
く

(雑中・一六六〇・西行)

●み吉野の山のあなたに宿もがな世の憂きときの隠家が
せむ

(古今集・雑下・九五〇・読人不知)

40 ふりにし里になりて荒れぬる 甘露寺元長

み吉野は山も霞みて白雪のふりにし里に春は來にけり
すなわち、40の本歌の「吉野」は、39の本歌の作者西行

(春上・一・藤原良経)

と、典拠も含めた寄合に連想の根拠を置いている。さらに
は、38に「山」が詠まれたことで、山類の句去区間(詠む

ことが禁止される区間)が発生し、40では「吉野山」を詠むことは不可能である。だから元長は、「み吉野は山も」の部分ではなく、「ふりにし里」を詞としたのである。その結果、さの句の表面から寄合の痕跡は消えてしまった。

④は、寄合が介在して本歌が連想されるという、最も高度な技法といえるだろう。

四、最後に

本稿は、前稿で紹介した「新古今集詞連歌」の内容を考察した。

第二章では当該連歌に採用された本歌を分析した。そして、連衆が新古今集から無作為に本歌を選択していることを導いた。本歌に恣意的な偏りが見られなかったからである。

次いで第三章では、付合の形式を考察した。それを四種に分類し、次の本歌が呼び寄せられる契機を探究した。最も高度な付合形式と考えられた④の場合でさえ、句・本歌と寄合との語句の共通性に、連想の根拠が置かれていた。

従って、より正しくは、本歌の選択は全く無作為に行われたわけではない。確かに本歌の選択に傾向といえるほどのものは見られなかったが、だからといって全く適当に選

ばれたのではない。本歌は、前句全体との共通性を基準として、新古今集から選ばれていた¹¹⁾。

連衆は新古今集全体を偏りなく記憶する必要があり、しかもその記憶は和歌の言葉（詞を含む）に主要な重きがある。その意味において、当該連歌は、その記憶をより強固にするための訓練であつただろう¹²⁾。一見すれば認識できると言葉の共通性に基づく付合が多いという、第三章の結論もその証左である。寄合を介在させる④は確かに高度な技法を用いているが、これは連歌の立場でいえば、最も連歌らしい、基本的な技法である。基本であるにも拘わらず高度に見えるのは、①②③があまりにも単純であるからである。連衆には付合に複雑な趣向を凝らすほどの余裕は見られない。この連想の単調さを考慮に入れるとき、芸術作品としてよりも、連衆の訓練として、当該連歌の存在意義を認めるべきである。

「新古今集詞連歌」は、前稿（小山順子・竹島一希）「新古今集詞連歌」翻刻と紹介」（『京都大学国文学論叢』第一八号）に拠る。また、新古今集の本文・歌番号は、田中裕・赤瀬信吾校注『新古今和歌集』（新日本古典文学大系11・岩波書店・平成四年一月発行）に拠る。時に注記しない限り、他の和歌は新編国歌大観（角

川書店）に拠る。但し、連歌本文・歌本文は、適宜漢字に改め、踊り字は開いた。連衆名は、官職等を省き、前稿で同定した名で記した。

〔注〕

（一）本稿では、「詞」と「言葉」を区別して使用する。「詞」は特定の和歌の詞章という意味のみで用い、それ以外の場合は「言葉」を用いる。

（二）8「梢まばらに秋ぞなりゆく」と93「谷狭み深くも鹿のかくるひて」の二句は、同一の「立田山梢まばらになるまに深くも鹿のそよくなるかな（秋下・四五一・俊恵）」に依拠しているが、これは賦物の原則に反している。本来、各句は異なる賦物をとるべきであつて、それは聯句の韻字の影響を受けた賦物にあつては当然のことである。能勢朝次『聯句と連歌』『能勢朝次著作集 第七巻 連歌研究』（思文閣出版・昭和七年七月発行）所収（第四章（三）（ロ）「賦物の起因——物の名の歌」七九頁参照）。

また、当該連歌の20「夜半に危き橋ぞ古りたる」には新古今集詞と指摘できる箇所が存在しない。新編国歌大観の範囲では、本歌といえるほどの重なりをもつ歌も見当たらなかった。何らかの誤解、誤伝が介在していることを疑わせる。

(三) 前稿において、本歌を二首想定した句が八句(1・6・38・43・45・58・68・86)あった。以下の表では、両首とも数え上げの対象としている。例えば、発句では、藤原定家

詠と源季広詠の二首を本歌と考えたが、この場合、表1の作者別被選歌数では、藤原定家一首、源季広一首と数えた。

(四) 当該連歌の67に新古今集六七番歌から撰取された詞は、「松島や雄鳥」である。ここでは同一歌の「波に荒らすな」の詞が制の詞であることを鑑み、六七番歌の他出状況を示した。

(五) 各秀歌選は、以下に拠る。

『近代秀歌』・『詠歌大概』……橋本不美男・有吉保・藤平春男校注『歌論集』(新編日本古典文学全集87・小学館・平成一四年一月発行)

『詠歌一体(甲本・乙本)』……久松潜一編校『歌論集 一』(三弥井書店・昭和四六年二月発行)

『近来風体』……佐々木孝浩・小川剛生・小林強・小林大輔校注『歌論歌学集成 第十卷』(三弥井書店・平成一一年五月発行)

『自讃歌』……黒川昌亨・王淑英編『自讃歌古注十種集成』

(桜楓社・昭和六二年九月発行)

(六) 前稿では、連衆の「冷泉前中納言」を、冷泉永宣または下冷泉為隆と推定した。本稿では煩雑さを避けるために、冷

泉永宣に統一している。なお、『国書人名辞典』(岩波書店)の「冷泉永宣」の項目には、当該連歌が一座した作品として掲載されている。

(七) 本稿では、前稿と異なり、前後の句・本歌との共通箇所、または特に強調したい箇所傍線等を付した。句とその本の共通箇所を示すものではない。

(八) 45の本歌の定家詠は羈旅の部に入集している。羈旅の歌に狩猟の趣向を読み取ることには不要であるが、述べ来たった表層的な言葉の共通性を考慮に入れて、句の「小鷹狩り」は「かり衣」に裏打ちされていると考えた。また、内容面では、45は44の「鳥」を「小鷹」と具体的に付けなしたわけではない。44一句では、「あはれ」を「知る」のが「鳥」なのか、「鳥の声々」を聞いている人なのか判然としない。だが、45はそれを前者に決定する。小鷹狩りが終わり、鷹に脅かされることなくった獲物の「鳥」たちは、生のはかなさという「あはれ」を感じているだろう、という句意になる。つまり、付合では「小鷹狩り」が趣向の重要な役割を担っているといえ、それを「かり衣」が基礎付けていると解する方が確実性が高いであろう。

(九) 『連珠合璧集』は、木藤才藏・重松裕巳校注『連歌論集 一』(三弥井書店・昭和四七年四月発行)に拠る。

なお、「水上↓山の嵐」は、『連珠合璧集』に、見出し語

「水上」のもと、「山の嵐」が寄合語として掲出されていることを示す。

(一〇)『連珠合璧集』の原文では、

水上トアラバ、

涙川 紅葉流れて

新古今 筏士よ待て言問はむ水上はいかばかり吹く山の嵐ぞ資宗

となつてゐる。「山の嵐」に傍線を付すことで、見出し語「水上」と傍線部が寄合であることを示している。一方、「嵐」の項目には、「嵐トアラバ……水上歌」とある。この寄合が和歌を典拠とする旨の注記であるが、具体的ではない。とはいへ、この二つの見出し語が逆の関係にあることは明らかであるから、「嵐↓水上」の根拠も新古今集歌であると考へてもよいだろう。

(一一) 源氏詞を各句に取る源氏詞連歌においても、源氏詞は、前後の句の詞の「出典となる場面中に共通して存在する、

表現や情趣」等が起点となつて選り取られている。本稿第三章の③に通じる技法である。安達敬子「室町連歌における原典の受容——「源氏詞連歌」二種——」『源氏世界の文学』（清文堂出版・平成一七年三月発行）所収）二九七～三〇〇頁参照。

(一二) 当該連歌と同時期で、ほぼ同じ連衆による大永年間の源氏詞連歌が「源氏詞訓練の営為」であることは、注一一前掲論文三二〇頁に指摘がある。

〔付記〕本稿は、平成一九年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

（たけしま かずき・本学博士後期課程、

日本学術振興会特別研究員）